

ADYF2013 夏 研究報告書

ミャンマーのマイクロクレジット～SRG～

Microcredit in Myanmar～SRG～

明治大学情報コミュニケーション学部2年 齋藤舞子

東京大学教養学部1年 島村浩太

東京大学教養学部1年 豊田瑠璃

東京大学教養学部1年 長谷川想

東京大学教養学部1年 土方貴史

東京大学教養学部1年 本嶋孔太郎

目次

0,イントロダクション

1,モチーヴ

2,SRG の概要

3,仮説

4,現地調査

5,現地調査のまとめ

6,結論

7,参考文献

0, イントロダクション

今回、私たちはミャンマーにおける SRG というマイクロファイナンスプロジェクトについてリサーチを行った。ミャンマーについての基礎データを以下に記す。

人口：約 6 3 0 0 万人

面積：6 7 万 7 0 0 0 km²

1人あたり GDP：8 3 5 ドル

※ミャンマーの1人あたり GDP は ASEAN で最下位

	2 0 1 0 年	2 0 1 1 年	2 0 1 2 年
実質 GDP 成長率	5 . 3 %	5 . 5 %	6 . 3 %

ミャンマーは上で見られるように近年安定した成長を続けているが、後述するように都市部と農村部で格差が存在し、このまま成長が続くとその格差がさらに広がっていくのではないかと私たちは考えた。そのため、農村の自発的な成長を促すプロジェクトとして SRG というものに着目し、その効果について仮説を設定し検証した。

1,モチーヴ

(1)なぜ貧困層を？

まず、はじめに、何故貧困層に着目したか、何故農村に着目したかをその動機を述べる。なぜ、貧困層に着目したか。それは、現在ミャンマーは、市場開放、資本主義化が進展し、外国企業の進出など急激な経済発展が進み、その結果として経済格差が拡大しつつあるからだ。比較的裕福な層は経済発展の恩恵を受け、所得を上昇させる一方で、これは農村に着目した理由にもなるが、工業化が進まない農村地域の人々、特に貧困層はその恩恵を受けることができず、相対的に経済格差が広がってしまう。そして、益々経済発展が進んでいけばその経済格差というものには修復が困難になってしまうと考えられるので、早急な貧困解決が必要となるのだ。それに加え、ミャンマーでは工業的農業という、農業の過程を細分化し、その過程ごとに人を雇い、仕事量だけお金を払う雇用形態をとる特有な農業が行われてきており、そのために、日雇い労働者が増え、安定した収入や大きな収入が望めないような状況が築き上げられてきた。これらのことがより貧困、経済格差を加速させた。このようなミャンマー独自の状況も貧困に着目した理由だ。次に、なぜ農村に着目したか。それは、貧困でありかつ貧困からの脱出が困難だからだ。というのも、都市部こそ経済発展しているものの、政治・医療・農工商業・金融・インフラといった生活を支えるシステムが脆弱な上、機械化が進まず、非効率的な農業や先ほど述べた工業的農業が中心であるため、所得があまり上がらない。また、農村では貧困のループには陥っている人が多く、そのために貧困が拡大しており、かつ、貧困からの脱出を困難にする原因を作られていると考えられるからだ。貧困のループというのは、日雇いだったり、小規模な商業や軽工業しか行えないため所得が低く、生活費もままならず、ほとんどの金融機関が利用できないので、生活のために貸金の前借や高利貸しからお金を借り、その結果正規の貸金（前借で得られる金額の倍程度）が得られなかったり、高利貸しへの返済に追われてより生活が厳しくなったりし、貯金が出来ず、所得が低いままとなる、というものだ。実際貧困線ベースの貧困率が都市に比べ高いことが、いかに農村が貧困かを物語っている。ここでいう、貧困線というものは成人一人当たりが年間に摂取すべきカロリーを金額ベースにし

て、その金額を所得が下回ってれば貧困とするラインのことをいう。以上が貧困層や農村に着目した理由となる。



貧困線ベースの貧困率 (BOP より)

	2005 年	2010 年
都市部	21.5	15.7
農村部	35.8	29.2

(2)なぜ金融機関？

次に貧困解決のための手段として、金融機関に着目した理由を述べる。貧困解決の手段として他に上げられるものに、物資金銭支援、インフラ整備、工業開発等があるが、これらはよく、先進国による押しつけだ、現地のニーズに合っていない、生活様式や文化を破壊する、根本的解決にならないといった批判をされることが多々ある。しかし金融制度を整え金融を通じた支援は、欠点 (信用がないと利用する人がいなくなる、お金の貸し借りだとお金が回収できず

崩壊してしまう、政府主体のマイクロファイナンスだと、政府に対して金銭援助を行っても実際には末端の借り手に届く前に完了たちの間で消えることがある等)があるものの、後述するが解決可能であり、比較的欠点の少ない、支援方法、貧困からの脱出手段となりえると考えた。貧困の原因のひとつである貧困のループを考えると、低金利の金融機関ができることで、そこからお金を借り、まず、ループの大元である、生活費のための賃金の前借、仕事のための見返りの高い道具の借入、高金利貸しからの借入、の必要がなくなり、正規の賃金が得られるようになったり、今まで金利で払っていた分のお金も合わせて、浮いたお金が貯金できるようになる。そして、その貯金したお金とさらに金融機関から借りられるお金を合わせて、起業したり、土地を買ったり、ミシンなどの副業用の機械を買ったりして、より収入を増やすことができ、貧困から脱出することができるのだ。また、子供を大学などの学校にやることができるようになり、その子供が有力な就職先について、家庭としての収入が上昇するなど、長期的に見ても収入増、貧困からの脱出に有効と言える。また、自分で借りて使うわけなので、比較的自由に、かつ自発的に支援の恩恵を享受でき、そのため、生活様式、文化が大きく変わることもないといえる。以上が金融組織に着目した理由だ。但し、農村では教育が進んでいないために、金融に関する知識(土地や仕事に対して投資する意味、設けるという事、節約するという事、貯金するという事)が欠けているので、お金を貸す機関があるだけではうまく利用できないので、同時にお金の知識、金融リテラシーを高めてくれるような訓練が伴っていなければならない。以上のことを基に、私達は最貧困層の定義を金融組織から十分にお金を借りられず、貧困のループに陥っている人々とした。以下、この最貧困層の貧困からの脱出もしくはボトムアップを軸に研究してきた結果を述べていく。

(3)ミャンマーの金融機関

まずミャンマー金融機関を述べたうえで、いままで述べたようなことを実現させるような、貧困層の貧困脱出の手助けとなるような金融機関を説明していく。ミャンマーには大きく分けて4つの金融機関がある。農業開発銀行(MADB)を主とした政府主導の金融機関、高利貸しや賃金の前借など、インフォーマル金融、PACTを主としたマイクロファイナンス(MF)、そして自助組織と訳されるSelf Reliance Groups(SRG)である。SRGは後述するが、UNDP(国連開発計画)ミャンマーがおこなっている、HDI(Human Development Initiative)プロジェクトの一環として作られた金融組織で、HDIの中でもCDRT(Community Development for Remote Townships Project)とICDP(Integrated Community Development Project)という二つのプロジェクトがあり、それぞれ形態は同じだが、金銭面で違いのあるSRGが作られている。またその、ICDPの中でPOPという金融組織に類似した形態も存在する

ので合わせて紹介していく。次の表は、それぞれの金融機関の特徴を述べたものだ。

ミャンマーの金融機関

		開始年	対象エリア	対象者	利用人数	借りるお金 (年間一人当たり) 平均所得：42万チャット	ローン方法	金利 (1月あたり)
農業開発銀行		1990	全国	農家(土地持ち)	130万世帯	6万	季節ローン、期間ローン	1.42%
マイクロファイナンス NGO	AMDA	2002	マンダレー	AMDAメンバー	1510	9万		3%ぐらい
	GRET	1995	チン	貧困層	4332	18万		
	PACT Myanmar	1997	乾燥、デルタ、シェン(22郡)	富裕層以外の農民	50万	24万	2週に一回分割返済、4か月で一括。返済完了のたびに借りれる金額が増える。初めは5000チャットだが、一年後に農業ローン、3年以内に高額ローンに昇格。	
SRG	ICDP型	1998	国境付近(カチン、チン、ラカイン)	中間層 貧困層 最貧層	7万人	1万	話し合い Poolが小さいため少額しか借りれない。緊急時に利用することができる。	2~5%
	CDRT型	2003	乾燥地帯(マンダレー、マグウ)	同上	35万人	20万	話し合い 基本的に仕事のためにしか使え	2~5%

			エー、ザガイ ン)、シェン州				ず、一定期間貯蓄しないと借りれ ない。但し pool は大きい	
POP(Poorest of the poor)	200 3	同上	最貧困層	2 ~ 3 万 人	物資支援			
インフォーマル 金融		全国	中間層 貧困層 最貧層				貸金の前借や、個人間での貸し借 り、担保なしでの闇金融	10~2 0%

まず、政府主導の金融機関でも一番利用者数の多い MADB について述べると、これは、対象者を土地持ちの農家に絞っており、使い道が農業だけと、制限の厳しいものとなっている。また、最貧困層は利用できない上、年間で借りられるお金は 6 万チャットと、ミャンマー人の平均所得が 42 万チャット (BOP より) ということを見ると、2 か月分の給料分しか借りられないこととなり、かなり少額である。このことから MADB は最貧困層の貧困のループからの脱出には有効ではないと言える。

つぎに PACT Myanamr だが、これは元々 UNDP ミャンマーのプロジェクトの一つである、HDI のフェイズ 2 で始まったものだが、デルタゾーンの Garman trust、ドライゾーンの PACT、シャン州の GRET の 3 つが 2005 年に統合され、新しくできたものだ。現在ではドライゾーン・デルタゾーン・シャン州の 22 郡を対象としている。ウェルスランキング法 (村人自らが村落の全世帯を 5 段階に分別する方法) に基づき富裕層を除く世帯の 18 歳以上の女性に貸出され、自発的な 5 人 1 組のグループが連帯保証で返済の責任を負う仕組みで、2 週間ごとに分割返済、そして集会への参加が課される。担当の人が定期的に話に行くことで、お金の使い道を指示したり、簿記の仕方を教えたり、より有効な MF の利用を促していた。現在 80 万人が利用しており、年間に 2 4 万チャット程借りられるため、借りられる金額としては大きなものとなっているが、2 週間ごとに返済する必要があるため、すぐ利益の出る副業 (乳牛を購入し牛乳を売るなど) を始めるぐらいしか出来ないため、実質制限があることになる。また、集会に行くのが貧困層には負担となるため、途中でやめる人も多く、さらに返済の見込めないような最貧困層には返済を渋っているという現状もあり、これも最貧困層の貧困のループからの脱出には有効ではないと言える。

次に、インフォーマル金融についてだが、これは主に村の高利貸しなどのことだ。月利の平均は10%ぐらいで、1990年の法律によって預金と所有不動産によってしか融資が受けられなかったのが発達してきた。利子は高く、審査が他のアクターに比べて緩いが、中には返済能力が低いと見なされる貧農には貸し出さないところもある。また、先ほど述べたようにこれから借りることで貧困のループにはまっているため、これを利用している限りは改善には繋がらない。

以上よりこれらは最貧困層の貧困からの脱却に繋がるアクターとは言えない。そこで、金融組織を使つての貧困解決の条件：①高利貸しの利子率は高く、一般的なマイクロファイナンスは貧困層に貸さないため、低金利で貧困層対象に貸してくれること。②農民、貧困層は軒並み金融リテラシーが小さく、貯蓄等の意識が弱いので、自らがお金の管理をする事で、さらにスタッフによる教育で金融リテラシー（貯蓄、貸し借りの意識）を高められること。③金融組織は農村になかったり、規則が厳しかったりするので、農村で実施され、規則も柔軟に対応できること。といった条件を考えると、SRG はそれを満たすことが分かる。このことがSRGを研究対象に選んだ理由だ。補足であるが、ICDPの中にPOPという組織があり、これはSRGにも年齢的（高齢で）だったり、独身の男性だったり、あまりにも貧困だったりして、加入できない本当の最貧困層を対象にしており、SRG同様グループを作らせ、そのグループに対して物資支援や教育を行うというものだ。まず、グループで一ヶ月に一度定期的にミーティングを開いてもらい、一ヶ月に20-50kyatの貯金を促し、定期的に出来るようになったらそのグループを卒業してSRGに加入させる。なお、返済についてはお金が準備出来てからで良いことになっている。また、全国で2008組存在したが、現在はHDIが終わった関係で全てのPOPは解散もしくはSRGに組み込まれた。

2,SRG 概要

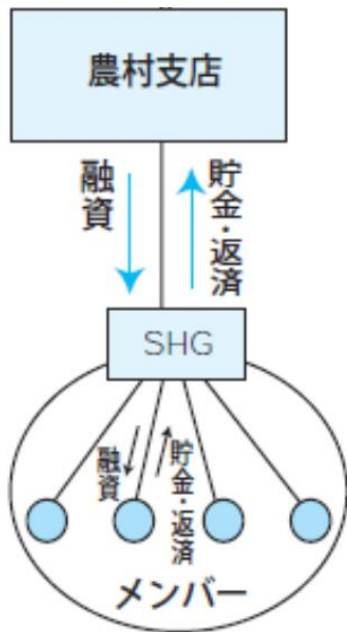
ここからは、SRGの成立過程、背景、目的、仕組みなど、SRGについて詳しく述べていく。

(1) SHG

まずはじめに、SRGの技術元となったSHGについて述べる。

SHGとはSelf Help Groupの略称でインドやブラジルで行われたマイクロクレジットプロジェクトの名称である。このプロジェクトの目的は、金融機関へのアクセスを持たない貧困層がグループを形成し、そのグループを介して小口の融資を受けられるようにすることである。その

システムは以下の図1の通りである。おおまかに流れを言えば、
 グループのメンバーが定期的に同額の貯蓄をする
 →メンバーの貯蓄を集め SHG グループの口座に預ける
 →金融機関から預金額に応じた量の融資をグループが受け取る
 →メンバー間で話し合い、受け取った融資をメンバーに再分配する
 となる。

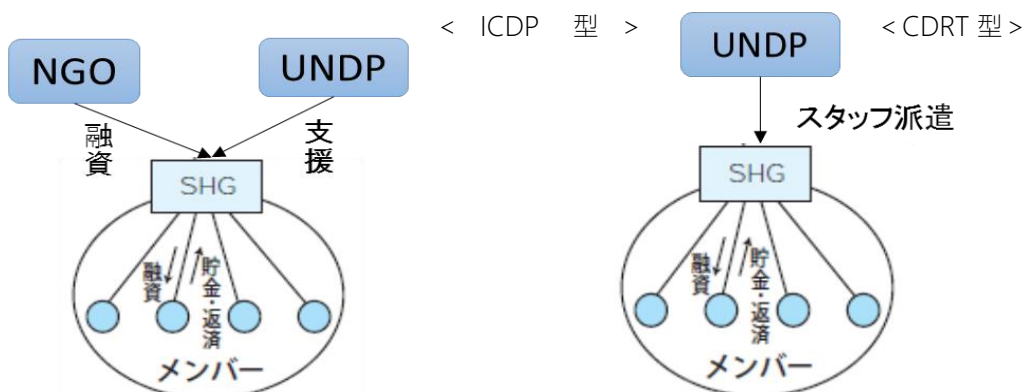


基本的に1グループ15~20人からなり、その9割以上が女性である。
 メンバーの中でも役割の分担がある(ミーティングの議長や簿記係など)

(2) SRG

SRG (Self Reliance Group) は1998年からUNDPによって行われたHDI(Human Development Initiative)というプロジェクトの一環で行われたマイクロクレジットプロジェクトの名称である。SHGと同様にグループを形成するものだが、ミャンマーでは金融機関が整備されていないため銀行などを介さないシステムに変化している。

その形態にはICDP主導のプロジェクトのものやCDRT主導のプロジェクトのもの2種類があり、以下の図のようなシステムとなっている。



SRG

SRG

CDRT 型と ICDP 型の SRG について少し詳しく述べる。まず、1994 年の HDI の設立の後をおって、CDRT の指導の下、東ラカイン州や北チン州に SRG が誕生した。2003 年からは ICDP も SRG の組織運営を始め、設置当初は SRG 運営についての的確な訓練なしで進められたが、2004 年からはスタッフにトレーナーをつけ、スタッフとメンバーにより、目標や達成度、組織的管理体系、金融管理体系、組織の責任基準、連携、学習努力などを査定された。CDRT 型では UNDP からの支援がなかったため、メンバーが少しずつ預金し、それをメンバーが必要なときに借りるという形式を取ったため、借りられるお金が小額で、あまり金融組織としての役割は果たせていなかった。逆に、ICDP 型の SRG は、ある村の 2 つの SRG では ICDP の予算の 12%、26% が SRG 活動に割り当てられ、そのお金で援助していたなど、資金が豊富で借りられるお金も高額で、金融機関としての役割を大いに果たしていた。そして、2008 年には一つの SRG のファンドが大きくなり、UNDP からの支援なしでも運営できるようになり、UNDP による支援は 2008 年に終了し、現在はグループが独立して運営されている。ICDP が運営していた中央地域では 2010 年より Pact Myanmar という NGO が SRG グループに直接融資を行う Whole Sale Loan というサービスが段階的に行われている。上記の支援とは金銭的なものだけでなく、メンバーのスキルトレーニングを行ったりグループの相談役となるようなサポートスタッフの派遣も含んでいる。

(3)SRG の形成

次からは実際の SRG の形成を見ていく。基本 SRG に入っている人は MF の借り手になれない人、支援だけでは自立できない人で、村人が話し合って相対的に所得の高い順に 1 ~ 5 段階に農民をランク分けしてできた、ウェルスランキングの 3・4・5 の農民が 1 世帯から 1 人だけ参加できる。基本的には、女性の方が計画的で返済意欲が強いため、参加者の 9 割は女性である。グループができてからの加入はあまり歓迎されない。というのも少人数のほうが運営するのが簡単であるからだ。そして、SRG は 5 ~ 20 人程度から成り、基本にお互いをよく知る近隣世帯によって構成されている。そのため、形成の段階で素行の悪い者は除外されることが

多い。また、同じ程度の所得の人がグループを作るように促される。一つの村の例だと、SRG は村にだいたい2～3あるのだが、土地なし層中心のSRG、土地なし層と土地持ち層のミックスのSRGと、土地も地層だけのSRGに分かれているようだ。

(4)SRG の第二の目的

SRG は SHG と違って、貧困改善だけでなく女性のエンパワーメントやコミュニティー形成も目的としている。女性のエンパワーメントというのは、SRG のメンバーは9割以上が女性なので(男性と比べて計画性があり、返済率が高いなどの理由から)、SRG を通じて女性が金銭を得ることで家庭内での地位が上昇するということである。

コミュニティーの形成というのは、ミーティングを通じて同じグループのメンバー間でビジネスに関する情報交換や、仕事や公共施設の扱いなどにおいての連携、緊急時の相互扶助を行ったり、成熟したグループ間で交流したりすることである。

なお、ミャンマーの人、とくに貧困層は自分たちの生活で精一杯で近所との付き合いなどに積極的でない場合が多く、また、コミュニティーの力、効果や他の住民が色々助けてくれる、他にも自分と同じ境遇の人がいる、ということを知らない例が多々みられる。しかし、ある意味強制的にSRGという枠組みでコミュニティー作らせることで、前述したようなことが実感でき、また、メンバーは同じような境遇の人が多いため、より絆、仲間意識が高まるなど、コミュニティー形成機能は非常に重要なものといえる。

SRG や SHG はバングラディッシュのグラミン銀行と類似する点もあるがそれとは大きく異なる特徴を持つ。まず1つにグループ事態に高い独立性が認められていること。SRG プロジェクトでは融資の分配や返済期間、金利などまで、グループの内部のことはグループのミーティングによって決まる。次に返済や使用用途に関する柔軟性である。

上に書いたようにメンバーからグループに返済する際の金利は低く設定できるし、使い道も基本的に制限は受けない(分配の際に用途によって額を小さくされたりなどはあるが)

返済でも、万一返済できないようならば利子の分の返済を免除するなどリスクマネジメントもある。そして、SRG 自体はUNDP の活動の一環として行われており、他の教育や医療、インフラ整備と同時進行なため、より、住民から信頼を得やすく、併合することで、効果を何倍にも高めている。SRG の形成により、帳簿やグループ名簿等ができた結果、UNDP が現地調査をするさい、よりデータが集めやすくなるといったメリットも生じているようだ。

3, 仮説

それではここで、上記の内容を受け、SRG に関する仮説を立ててみよう。その仮説には、大きく分けて三つの柱がある。

- ① 貧困改善に有用である。
- ② コミュニティーが形成され、金融以外の副次的効果をもたらし、QOL を上昇させる。
- ③ SRG を通して金融に関する意識が向上し、自立的な金融組織の運用を行えるようになる。

それぞれ詳しくみていくと、①に関しては SRG ができ、それを利用することで、最初に述べた貧困のループから脱出することができるのか、参加者の所得向上はみられるのか、日雇い労働からの脱出はみられるのか、といった要素から判断する。②に関しては、SRG 自体を使ってのお金の貸し借り以外の取り組み、活動は行われるのか、UNDP や政府は SRG というコミュニティーを利用して、それに対して支援（医療、教育、物資）や政策の実行を行っているか、SRG 同士、SRG 内での情報交換、助け合いは行われているか、といった要素から判断する。③に関しては、これ自体が UNDP の掲げている目標であり、それが達成できているのか、思惑通り行っているのかを見る。

4, 現地調査

以上の仮説の妥当性について検証するため、私達は 9 月 13・14・16 日の三日間、ミャンマー農村においてフィールドリサーチを行った。実施地はマグウェー管区内の 2 つのタウンシップ、Pakokku と Kyaukpadaung の中の 3 つの村である。以下でこの調査地の選定理由を述べていく。

マグウェー管区は、ミャンマーを山岳地帯・ドライゾーン・デルタゾーンという 3 つの地域に分けた場合、ドライゾーンに位置する。UNDP の HDI プロジェクトは、CDRT 主導の国境地帯（山岳地帯）と ICDP 主導のデルタ・ドライゾーンでは SRG への支援方法が異なっており、

国境地帯では SRG への金銭的支援が少なかった（あるいはほぼ無かった）ため、デルタ・ドライゾーンに比べファンドの規模が小さい。そこで、SRG の効果がより見やすいと考えられたデルタ・ドライゾーンを選択した。そのうえで、SRG が実施されていて、かつ交通の便の良いマグウェー管区に決定した。2 つのタウンシップで実施したのは、データの偏りを減らし、地域によって顕著な差があるのかを確認するためである。そして、その中からさらに、SRG の数が多く、UNDP の支援額も大きい 3 つの村を対象地を絞った。

(1)調査方法、概要

調査には質問票（付録 1）を使用した。対象者はすべて女性であり、SRG 加入者、SRG 非加入者、または Pact Myanmar 加入（希望）者である。以下で各村での調査の概要を述べていく。

1 日目

Pakokku の Htan Taw Kyauk 村で実施した。周りは草原で、家畜が多く、カゴ作りが盛んであった。軽い材質でつくられた家が多く、電線の本数は少なかった。このことから、ほかの村、地域との関わりや交易等は薄いと考えられ、外観からもほかの村に比べ比較的貧困な村であると考えられる。全世帯 161 のうち、（私たちの調べでは）SRG 参加世帯は 67 で、参加率は 41.6%である。SRG は 10 グループあり、このうち 3 グループ・7 人の女性を対象とした。

2 日目

Kyaukpadaung の Phet Taw Ye 村で実施した。山腹に位置し、近くには学校・パゴダ（寺院）・工場がある。家は密集しており、トタン屋根が多かった。また、電線の本数が多く、整備されていた。火山灰のおかげで、土地は肥沃で、農業生産性は高いそう。農業や近くの向上の存在もあってか、比較的裕福な印象を受けた。全世帯 133 のうち SRG 参加世帯が 85 で、参加率は 63.9%である。SRG は 5 グループあり、このうち 2 グループ・4 人の女性を対象とした。加えて、SRG 非加入者にも SRG に参加していない理由等を尋ねた。

3 日目

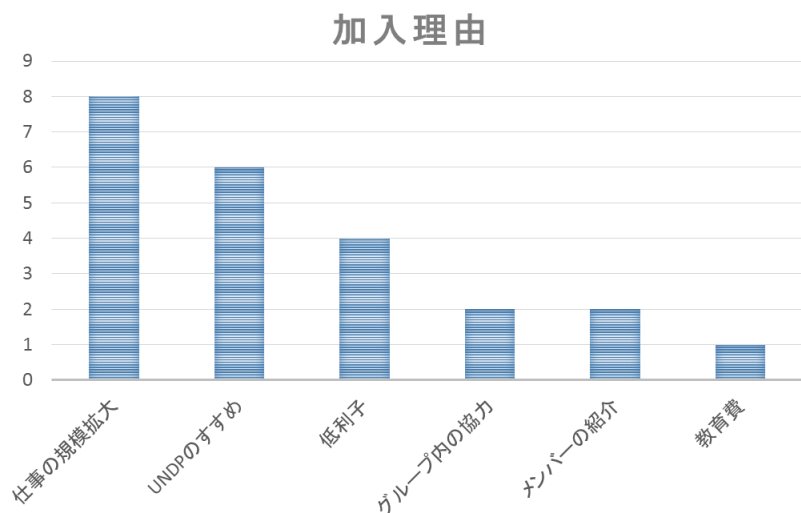
Pakokku の Chauk Kan-East 村で実施した。周りは草原で、大きな道路が村を横断している。トタン屋根の家が多く、自転車・バイクを所有する家庭が多かった。また、電線・電柱が整備されていた。ほかの村とのアクセスもよいため、交流公益が行いやすいように感じられた。また、比較的裕福な村ではないかと考えられる。全世帯 262 のうち SRG 参加世帯が 97 で、参加

率は 37% である。SRG は 5 グループあり、すべてのグループ・9 人の女性を対象とした。さらに、Pact 利用者 2 名と、SRG を脱退して現在 Pact 加入を希望している方 1 名にも話を聞いた。

(2)調査結果

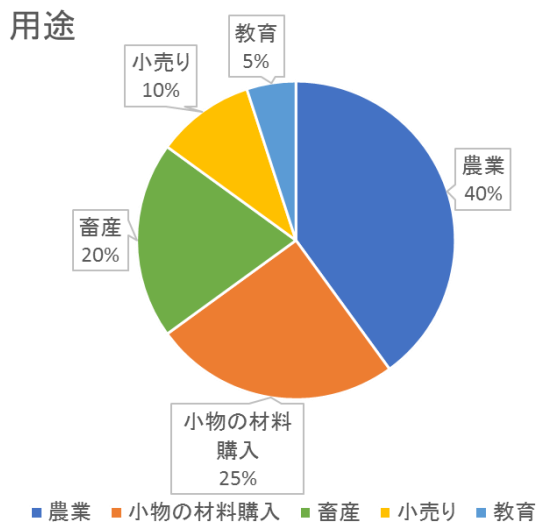
今回の調査の対象者は全 26 人で、このうち SRG 加入者は 20 人である。加入者は、下は 23 歳から上は 55 歳までで、年齢層別には 30 代が 8 人と最も多かった。学校に通う子供を持つ世帯は 7 世帯であった。

以下のグラフは SRG への加入理由をまとめたものである。(20 人、複数回答有)



4 つ目の「グループ内の協力」という項目は、SRG に入れば情報交換や共同出荷など仕事の面でメリットがあると期待して入ったということである。

次の円グラフは SRG で借り入れたお金の用途を示している。(20 人、人数比、複数回答有)



畜産の部分は、そのほとんどが豚や鶏であった。ある SRG では牛を購入したのは 20 人中 4 人であり、SRG の融資だけでは、豚や鶏に比べて高価な牛を購入するのは困難であると考えられる。

貧困改善の効果

SRG に加入して以降、所得が向上したと実感した人は 6 割であった (20 人中 12 人)。また、所得が 2 倍になったという人、3 倍になったという人が 2 人ずついた。所得が 2 倍以上になったというこの 4 人はかご作りか衣服の仕立てで生計を立てており、材料購入費用を SRG から借りている。これらの手工業は、天候によって毎年収入が変化する農家と比べて収入は安定しているため、所得向上という面での SRG の有効性を如実に表している。言い換えるならば、少なくとも手工業分野の所得向上に関しては、SRG は効果的といえるのである。また、所得向上を実感している人が 6 割に上ることから SRG は所得向上にある程度有効であると認められる。

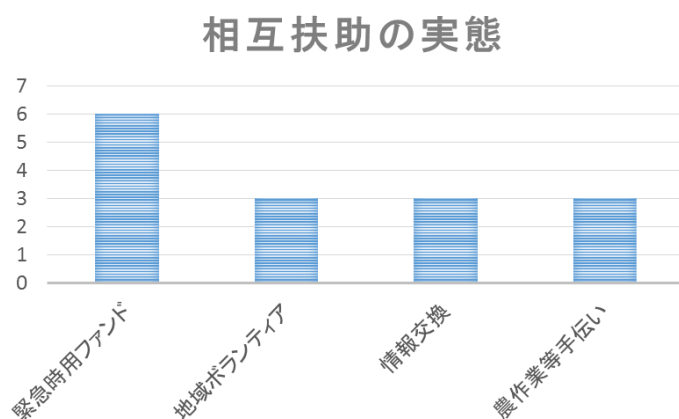
しかし、とはいっても多くの世帯の収入は依然としてカロリベースの貧困ライン (具体的な数値) を下回っている。さらに、SRG の融資額は小さいので、融資額を増やすためには、利用者はお金を借り、利益を生み出して返済するというサイクルを幾度も繰り返さなければならない。実際今回の調査で、より大きい額の融資を受けられる Pact ミャンマーを利用するため SRG を脱退したという人がいた。以上のことを踏まえると、SRG の所得向上効果には限界があり (所得向上の面では Pact Myanmar のほうが効果的である)、利用者の生活を大幅に改善することはできないと考えられる。

ただし、SRG の融資により日雇いからの脱却からの脱却の可能性がうまれるという点は大きな意味を持つだろう。今回の調査において、かご作りで生計を立てていたある家族は、SRG 加入前は人に雇われてかごをつくっていた。またある家族は、材料を借りて、作ったかごの一部

を納品していた。いわば小作人の状態である。しかし、SRG の融資により、カゴの材料を自ら買えるようになると、前述のように収入が 2・3 倍にまで上昇した。SRG の融資がこのようなうまく活用されれば、日雇いからの脱却・小作人状態からの脱却も不可能ではない。

コミュニティ形成・相互扶助促進の効果

下のグラフは、SRG 内でどのような相互扶助活動が行われているかをまとめたものである。(10 グループ、複数回答有)



最も多く見受けられた緊急時用ファンドというのは、病気・怪我・葬式などのために予想外の出費をせざるを得ない SRG メンバーやその家族を支援するものである。通常のコミュニティファンド(毎週 200 チャット、約 20 円の貯蓄)とは別に積み立てられており(毎週 100 チャット、約 10 円の貯蓄)、返済の義務がない場合も多い。また、学校・寺院の掃除や井戸・道路の修理・修繕など、地域ボランティアを積極的に行っている SRG もいくつかあった。それとは別に、仕事に関する情報交換(農業アドバイスなど)や収穫時の手伝いなど仕事面での協力も見受けられた。緊急時用ファンドというのは SRG 成立前にはもちろん存在しなかったし、地域ボランティアも以前は無かったというから、SRG がコミュニティ形成と相互扶助の促進に一定の役割を果たしていると考えられる。

5, 現地調査のまとめ

ここで改めて現地調査の考察をしてみると、調査対象の 6 割の農民が所得の上昇を実感しており、実際に収入が 2 ~ 3 倍になる村民もいたが、それでも貧困ラインを下回ることに変わりはなく最低限の生活を送るので精一杯であるようである。例えば牛や農耕用の機械を買ったり、職業を変えたりといったことは現状の収入では難しく、副業や本職に投資をする程度に限

界で、SRG が飛躍的に農民の生活に変化をもたらすことはできないと感じた。ただし、利率が 10% 以上の高利貸と比べると SRG の利率は平均 2 ~ 3 % と低く、その分収入が増えていくため、時間をかけて SRG の活動を繰り返していくことで、高利貸しから借りるために現金収入が手に入らないという事態は避けられ貧困のループ脱出の一助となると考えられる。日雇い労働から脱却できるかという点については、今回の調査対象の中で実際に日雇い労働から脱出して自分で材料費を負担しカゴ作りを始めていた人がいたことから考えると、日雇い労働から脱出した後に新たに始める商業や農業の資本金が SRG からの貸与で賄えるならば、またそういった営業プランが立てられるならば、日雇い労働から抜け出せると考えた。商業についての知識がなかったり、営業プランが立てられなかったりしても後述のコミュニティーとしての SRG 内で助けあいや情報交換が行われることで対処できる。

次に SRG に期待された効果として、貧困脱出ではなく、農村でのコミュニティー形成という側面に着目する。ミャンマーの農村では村人が集まったり、会議をしたりすることは珍しく、集団としての意識が強くないと言われている。そのため週一回のミーティングでも新たな刺激となりコミュニティー形成、つまり集団でボランティアや行事を行ったり、メンバー間での助け合いが生まれたりすると考えられた。実際の調査でも確かに多くのグループで、集団で寺院や村の掃除などのボランティアを行ったり、怪我人や病人のために別のファンドを設けて彼らのために用いたり、市場や仕事についての情報交換をしたりしており、さらにはコモンファンドをインフラの整備に使うグループも存在した。

ここで、改めて SRG というシステムを考える。SRG では原則として、誰が何のために借りたお金を使うかは記録される。さらにそのお金は自分が定期的に貯金したものであり、自分が多くの額を借りるためには借りる、投資、利益創出、返す、借りる... というサイクルを繰り返すしかない。故に今までは借金の返済や日々の暮らしに精一杯であった村民も SRG での活動に関わる内にお金の流れや、お金をどう使うべきか、使わなければならないかを必然的に意識するようになる。SRG の中には先述の通り市場やビジネスについての情報交換をミーティングで行うものもあり、活動をしていく内にメンバーの仕事に影響され他の職業に興味をもったというサンプルも存在した。こうした高まった金融や職業への意識や興味は、副業や現在の職業の改善といった形で結実する。当然、そのための投資には SRG のお金が用いられ、借入者は利益の出るように投資をし、利子を含めた返済をする。毎週の貯金に加え、利子を含めた返済により SRG のコモンファンドは強化され、返済を果たした人にはより多くの貸与がされるようになる。このサイクルを繰り返すことによりコモンファンドは強化されていく。このサイクルはあくまで理想形ではあるが、多くの回答者が現在借りられる額は初めて SRG から借りた額よりも多くなっており、副業にしる現在の仕事への投資にしる、何らかの形で利益を創出し、返済の

義務を果たしているようである。もちろん、いくつも副業を始められるわけではないし、より多く利益を出していくことはサイクルを経るごとに大変になるであろうが、メンバー間の情報交換や助け合いがその点に対処してくれると期待できる。またコモンファンドが強化されるということは言い換えるのならば、セーフティーネットが強化されていくということである。今回の現地調査で訪ねた SRG の中にはコモンファンドを学校の建築や道路の舗装など公共施設の建設、整備やインフラ整備に用いたり、病気や怪我など緊急時に医療費として用いたりするグループが存在しており、こういった意味でコモンファンドの強化は農民のための最低限の福祉をボトムアップ、維持していくことにつながるのではないかと考えられる。村民は自分の興味や目的をもって利益を出そうとするが、結果的にそれが自分たちの福祉保障に繋がっている、こうした性質を SRG は内に持っているのではないかと考えられる。

問題はその性質に気づいていない SRG が多いという点である。現地調査で訪ねた 10 グループほどの中でコモンファンドをインフラ整備に用いていると答えたものはわずか一つであった。今後、SRG 同士の交流、協力ができるよう、SRG を組織化し情報共有していくことが求められる。

6, 結論

ミャンマー、特にミャンマーの地方は金融制度がとても脆弱で、気軽に誰でも、お金を借りることができない状態が今もなお続いている。そのために高利貸しからお金を借りたり、賃金を前借りしたり、逆に何か事業を始めようと思っても資金がなく、どうしようもなかったり、と貧困のループからの脱出が困難な現状がある。しかし、UNDP 主導で作られたこの SRG は、まだ、規模は小さいものの、農民を主とした貧困層にお金を借りて使う機会を提供するだけでなく、柔軟なルールのもと、同時に教育も行うことで、より貧困改善を実現しつつある。ある程度自由に使えるお金という、制約の少ないものを提供することで、より現地のニーズにあった支援ができ、また、自らお金を使うことに加え、コミュニティーの形成を促していることも相まって、より自立的な貧困改善を可能にしている。

ここで、再度仮説の検証を行う。

①に関しては貧困のループからは多くの人が脱出でき、所得自体の向上も見られる場合が多いが、微々たるものである場合が多く、職が得られても副業程度で、土地を新たに手に入れたり、日雇いからの脱出に成功する人はまだ少ない。つまり、現段階では資金に限りがあり、貧困層の底上げに留まっている。しかし、別の見方をすれば、今まで、ボトムアップすらできな

かったことを考えると、ボトムアップは可能な点で有効といえる。つまり、貧困改善という仮説はある程度は正しかったと言える。

②に関しては現地では以心同体グループと呼ばれるなど、強固なコミュニティーが形成されるケースは多々見られ、SRG を使って、ボランティアをしたり、SRG 内で仕事の手伝い、知識の共有、情報の交換、アナザーファンドを作って、病気になった人の見舞金に使うなどの例が見られた。しかし、UNDP が SRG を利用しての支援は見られなかった。それでも、これを利用しての支援、政策の導入の可能性はあると考えられる。また、近年、SRG 同士での組織が形成され、どうやったらうまく運営できるかなどの情報交換が見られ、より大規模な組織だったものになる可能性がある。つまり、コミュニティーの形成により QOL が高まるという仮説は正しいが、SRG 自体を別の組織等が利用するという仮説は現段階では誤りと言える。

③に関しては、実際に金融教育が行われたり、恒常的な貯金、度重なる loan により、お金の価値がわかるようになり、また、お金を貯めることの意義を見出せるようになった結果、金融に対する意識（お金を有効に使おう、より儲けよう等）が高まっているという現状が見られた。また、先ほど述べた他の SRG との連携、組織化がみられるなど、より自律的な体系が出来上がっているといえ、また、農民自体も UNDP の支援がなくなった後も続けたいという人がほとんどで、より自立的な運営に近づいてきているといえる。つまり、仮説は正しかったといえる。

最後に、仮説の検証、本文全体を受けて SRG の本質について述べよう。SRG の活動を通して今までは貯金や投資に無縁であった村民も貯金、借入、融資、返済というサイクルを繰り返し、自らの生活の質を上げていくことができる。さらに、このサイクルを繰り返すことでコモンファンドは増大していく。また、それと同時に SRG というコミュニティーを利用しての活動が行われるなど、副次的な効果も持ち、メンバーの福祉を保障するセーフティーネットも強化されていく。このように、SRG は特に ICDP 型のもは大成功こそ少ないものの、確実に最貧困層の所得の向上、生活の改善に貢献しており、優秀な金融組織といえるだろう。しかし現時点ではこの性質は住民に意識されることは少なく、どう浸透させていくかが課題となる。これからは、その SRG の数を増やし、範囲を広げ、その連携を作っていくつつ、教育も同時進行で行うことで、SRG によって実現しうることに、そのメリットを住民に理解させていくことで、メンバー全体の貧困解決、生活向上に寄与することとなるだろう。そして、最終的にはミャンマー全土における金融の中心なりえるかもしれない。

7,参考文献

- 春日 孝之 (2012) 『未知なるミャンマー』毎日新聞社
- 高橋昭雄 (2012) 『ミャンマーの国と民』 明石書店
- 高橋昭雄 (2006) 「ビルマの山村経済と資源利用」、『季刊 公共研究』、2 巻、1号、千葉、千葉大学大学院人文社会科学研究科公共研究センター、pp. 23 - 32。
- 高橋昭雄 (1999) 「ミャンマー：困難な市場経済化への移行」、『アジア経済論』、東京、NTT 出版、pp. 295 - 323。
- 高橋昭雄 (2005) 「植民地統治下の下ビルマにおける「工業的農業」の展開：ファーニバル説の再検討」、『アジア経済』、26 巻、11号
- 藤田 幸一 (2005) 「アジア農業金融再考 —農村調査の現場から—」
- 藤田 幸一・岡本 郁子 (2000) 「ミャンマー乾期灌漑稲作経済の実態：ヤンゴン近郊農村フィールド調査より」
- Ikuko, Okamoto (2009), Issues affecting the movement of rural labour in Myanmar
- Ikuko, Okamoto (2004), Agriculture marketing reform and rural economy in Myanmar, Paper presented at the Parallel Session II, " Reform in Agriculture – Country Experiences from Asia" GDN the5th Conference
- AYE, Chan Pwint (2011) 「ミャンマーの農村地域における貧困発生メカニズム」社会関係研究 17(1), 1-52
- Tomoko, Kaino (2006), Rural credit markets in Myanmar, Asian Journal of Agriculture and Development 3(1&2) 1-15
- Tomoko, Kaino (2007), the Determinants of Sustainability, Outreach and Poverty Alleviation in Microfinance Program in Rural Myanmar; a special interest on Local Economic and Social Condition 2007
- 社団法人 海外農業開発コンサルタント協会 (2004) 『中央乾燥帯農村地域生活向上支援事業』
- Hirohisa, Yukawa (2008), Recent Trend on Microfinance in Myanmar : How MF NGOs Work under Military Government?
- 布田朝子 (2010) 『ミャンマー農村とマイクロファイナンス』 風響社
- 湯川洋久 (2007) 「ミャンマー・マイクロファイナンス最新状況」
- 日本貿易振興機構ジェトロ (2012) 「BOP ビジネス潜在ニーズ調査報告書ミャンマー：農業資機材分野」
- Policy Unit, UNDP (2009), Self Reliance Group (SRG) Case Studies
- 世界銀行 <http://www.worldbank.org/> 6/27
- NNN.ASIA <http://nna.jp/free/news/20130624inr001A.html> 6/27
- JETRO (2013) 「インド BOP 層実態調査レポート」
- 地球の友と歩む会 LIFE <http://www.ne.jp/asahi/life/home/int/shg.htm> 6/27

サンチャイブログ <http://sanchai-documents.blog.so-net.ne.jp/2009-09-29-1> 6/27

中村まり (2004) 「貧困層を顧客とする産業 —インドのマイクロファイナンス、農村市場開拓の取り組みを取り上げて」

Glen, Swanson (June 2011 to May 2012), Independent Assessment Mission on the Human Development Initiative Myanmar

UNDP Yangon (2006), Impact of the UNDP Human Development Initiative in Myanmar, 1994-2006